## おしゃれも暮らしもエンドレス

イラスト・文　本田葉子

今、エアコンの効いた部屋。ぐるっと見回すと床の上には健康グッズが点々と散らばっている！　イボイボがついた青竹踏み、くるくる回るバランスボード、ストレッチポール、マッサージボールなどが日本庭園の飛び石のように床に置かれているのだ。暑さで外出も最小限になってしまっているので、せめて運動不足解消にと、青竹踏んだり、ストレッチポールを背骨に当てて寝転んだりしてみる。それだけでも「イテテテッ」やら「わお～」やら思わず声が出るものだから、よほど体が固まっているんだなと予想されるよ。体と同様に、おしゃれゴコロも停滞しがちだ。身につけるものは少なくラクでと、ひたすら着心地いちばんになるのは必至だもの。

### 着心地いちばん

麻やコットンガーゼでゆったりして締め付けがないワンピース。一枚で完結するワンピはサイコー！　ちょっと外に出るときは薄手のペチパンツをはく。ペチパンツは脚の汗のベタつき解消にもなってくれ、ありがたい♪

白色はもちろん数色持っていると、また違ったイメージで着られる。ゆったりとしたサイズのペチパンツは、ワンピース同様にストレスなく身につけられるうれしいアイテムだ。

アクセサリー、なにか一つはいつも身につけたい希望ありのわたしはピアスに頼りきる。ボルドーや濃紺のゴージャスタイプ、そろそろいってみるか。

暑さも後半過ぎだ。わたしの畑の夏野菜も終盤に向かっているところ。飛び石置きの健康グッズたちで整えられるところは整え、革のバッグなど季節を気にした持ち物を手にしたい。そんなおしゃれの芽のような気分を大事にしたいと思う。

（隔月掲載）

## ずいそう

### 生きるに値するもの

北村記世実（パレスチナ・アマル代表）

エジプトにはガザからの避難民が何万人もいると聞く。特にエジプトから支援を受けられるわけでもなく、生活に余裕がない人も少なくない。子どもたちも公立の学校には通えない。

デザイナーのロザンから紹介されたのが、そんな避難民の一人であるサラさん。まだ二十代の若い女性だ。パートナーの家族と一緒に避難して、幼い男の子を育てている。アクセサリー作家でもあるサラさんは、作品を売って得たお金をガザにいる家族に送金している。寝室の一角に置いたテーブルを小さなアトリエにして、アクセサリー作りに精を出す。

昨年12月、エジプトの彼女を訪ねると、糸鋸（いとのこ）で薄い真鍮（しんちゅう）板を切り、リングを作るところを見せてくれた。目を引いたのは、パレスチナの地図に美しい流線でデザインされた、アラビア語のカリグラフィーのペンダント。現地の詩人マフムード・ダルウィーシュの詩の一節で、意味は〝On this earth there is something worth living for〟（この地上には、生きるに値するものがある）。

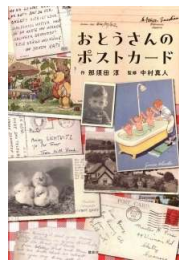
ペンダントを紹介するとあっという間に完売した。サラさんに再び発注しているところだ。

今、私が立ち上げようとしているのが、ロザンのガザ・スタッフによるアラビア語講座だ。オンラインをつなぐことができれば可能なので、今度テストをする予定だ。

ガザは才能の宝庫であり、可能性に満ちている。ひとり一人の能力を生かした事業を立ち上げ、彼女たちを応援したい。

Amal for Gazaホームページ　https://amal4gaza.org/

## 代田知子さんおすすめの子どもの本　大人もぜひ！



講談社　1600円＋税

**おとうさんのポストカード**
那須田淳　作
中村真人　監修
（小学校高学年～）

小峰書店　1300円＋税

**ひろしま絵日記**
中澤晶子　作
ささめやゆき　絵
（小学校中学年～）

童心社　1700円＋税

**1945年8月6日　あさ8時15分、わたしは**
**原爆を体験した子どもたち　言葉**
**いわさきちひろ　絵**
（小学校中学年～）

戦後80年の８月。小学生から読める戦争の本を紹介する。『**おとうさんのポストカード**』は、第二次世界大戦直前、１万人のユダヤ人をすくった「いのちの列車」で父親と別れ、ベルリンから一人でイギリスに渡った６歳の少年の実話物語。イギリスでも差別され、傷つく少年を支えたのは父から届くポストカードだった。少年とドイツから出られない父親の様子やその思いがひしひしと伝わる。戦時下の様子、ユダヤ人虐待などが分かりやすく説明され読みやすい。巻末に、ドイツからイギリスに子どもたちを送った「キンダートランスポート」の解説、年表が付く。

『**ひろしま絵日記**』の主人公は小２の少女だ。ひいおばあちゃんの妹が２年生のころに書いた、戦時中の古い絵日記を見つけ、ひいおばあちゃんに説明してもらいながら読みすすめる。日記には戦争のためにひなまつりを我慢したこと、食べ物がないこと、姉が疎開に行って寂しいことなどが書いてあるが、８月５日で突然止まる。６日に何が？同い年の子が書いた日記で、はじめて「原爆」を知る少女の物語。親子で読めば低学年から。

最後は、被爆から80年、原爆を体験した子どもたちの作文をもとにつくられた『わたしがちいさかったときに』を底本として、現代の子どもにも伝わるようにと企画された『**1945年８月６日　あさ８時15分、わたしは**』。６人の子どもたちの作文、あまんきみこ、アーサー・ビナードらの言葉や詩と、いわさきちひろの絵。語り継ごう！

## BOOK

### 恋恋往時（れんれんおうじ）

温又柔（おんゆうじゅう）

集英社　1800円＋税

日本と台湾、現在と過去をめぐる４つの短編。著者と同じく日本で暮らしながら台湾籍だったり、夫と離婚し独身を貫いた70代の女性など「ふつう」からはみ出た女性が登場する。家での会話には台湾語、中国語、日本語が混ざっていたこと、戦争や日本統治時代を生きた祖母、離れて暮らす父、母と歌った言葉遊びなど、ふと家族との記憶を辿る。その思い出がアイデンティティーのゆらぐ今の自分を肯定する。「ふつうじゃなくても大丈夫」と。

### 地方女子たちの選択

上野千鶴子　山内マリコ　藤井聡子

桂書房　1800円＋税

「私たちはなぜふるさとを出たのか」。富山生まれの社会学者・上野千鶴子と作家・山内マリコの共著は、序盤で自らの育ちを振り返る。メインは富山の14人の女性の半生の聞き取りだ。その語りから彼女たちが何を背負い、何を考え、何から逃げたかったのかを再考する。「地方の女性流出」など、数で女性を見ていても人口減少は止まらないだろう。人生の選択肢は必ず社会構造に規定される。だからこそ、生の声から未来を考えたい。

### 編集部から

戦後・被爆80年の特別の夏。「なかったことにさせない」と高齢の被爆者や戦争体験者の言葉が重く響くなか、戦争責任に向き合おうとしない石破政権の異様さが浮き立つ。やはり政治を変えねば。（あ）